

## 【ポスター発表】

## 院内ピア・サポートの現状と今後の課題

- がん体験者の視点からみた期待と危惧 -

淑徳大学大学院総合福祉研究科 土田 直子 (8101)

キーワード：がん体験者 ピア・サポート 院内患者サロン

## 1. 研究目的

2007年に策定された「がん対策推進基本計画」の中に、「がん患者はもとより家族に対する心のケア(精神的支援)が行われる相談支援体制を構築していく」と「心のケア」という言葉が盛り込まれている。「がん患者や家族等が、心の悩みや体験等を語り合うことにより、不安が解消された、安心感につながったという例もあることから、こうした場を自主的に提供している活動を促進していくための検討を行う」とも記されている。また、2010年6月15日に出された「がん対策推進基本計画の中間報告(厚生労働省)」の中には「相談支援センター」が「地域のがん患者、及びその家族等と共同で、患者及びその家族を対象とするピア・サポートを行い、これを国として支援すべきである」と明記され、ピア・サポートの活動が、一層推奨されるに至っている。このように、ピア・サポートが推奨される背景には、体験者相互の関わりが、心理・社会的支援として有効であるという経験に基づく実感がある。しかしながら、「どのような場が求められているのか」の検討は十分ではなく、「どのような場が提供されているのか」の把握もあきらかではない。そこで、がん体験者が、院内ピア・サポートについてどのような期待と危惧を抱いているのか、ピア・サポートの現状はどのようになっているのかを調査し、今後のピア・サポートを考えていく上での参考とすることを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

がんの体験は個別的な出来事であり、病気の部位、症状、経過、現在の状況などそれぞれの経験は異なる。がん体験者が、ピア・サポートに抱く期待と危惧については、がん体験者自身の言葉で、どのように感じているのかを表現していただくため、自由記述による回答を求めた(2009年12月~2010年2月)。なお協力者募集にあたって配布したチラシには、筆者ががん体験者であることを明記した。また、千葉県内のがん診療連携拠点病院のピア・サポートの現状に関しては、患者会の訪問調査(2010年)に同行し、その後、文書等により追跡調査を行っている。

## 3. 倫理的配慮

自由記述による質問紙調査に関しては、個人情報保護に配慮すること、調査協力は自由意志であること、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと等を文書にて説明し、質問紙の返送をもって同意したとみなした。本研究は、淑徳大学大学院総合福祉研究科研究倫理委員会の承認を得ている。なお、本研究の発表にあたり、日本社会福祉学会の「研

究倫理指針」に基づき倫理的配慮を加えた。

#### 4. 研究結果

##### がん体験者はピア・サポートに何を期待するか。

「体験者による相談窓口」を【利用する】理由としては、「体験者でなければ本当の気持ちはわからない」という「**気持ちの支え**」や「体験談を参考に」という「**情報**」、病院内にある、行きやすさやなどがあげられた。院内患者サロンに関しては、【利用する】理由として、「話しあう・語りあう」ことによる「**気持ちの支え**」、他の人はどうしているのか「**情報を知りたい**」、「**独りじゃないと心強い**」という「**仲間**」への期待が記された。一方、「雰囲気に対する懸念(傷のなめあいになるのでは)」を持つ人もおり、訓練を受けたファシリテーターの必要性が指摘された。

体験者同士の関わりは、多くを話さなくても「わかりあえる」という喜びをもたらす。また、「家族にも話せない」「家族だから話せない」愚痴や、不安を話せる「場」があるということが力になる。また、治療方法や、生活上の対処方法などの具体的な情報を先輩の体験者から聴くことができる「場」であるという実際的な面もある。「話す」「聴く」が交わされる「場」があるということが、「支え」になることが示唆された。

##### 千葉県のパイア・サポートの現状

千葉県内にある14のがん診療連携拠点病院の、体験者による相談窓口・患者サロンの開設状況を調査したところ、「体験者による相談窓口」を実施しているのは5病院であった(2010年10月現在)。ただし、常時、職員として体験者が相談にあたるのは1施設のみである。他の施設では、患者会等で訓練を受けた体験者がボランティアとして活動している。「患者サロン」については、14のがん診療連携拠点病院のすべてが、何らかの形で「がん患者サロン」を実施または実施予定(2011年6月現在)であった。しかし、「がん患者サロン」といってもその形態は様々であり、体験者中心で自分の想いを語る「わかちあい」から、病院の医療者によって行われる、情報提供・学習に中心が置かれるものなど、様々である。また、開催時期も月一度、定期的に行われるところから、不定期というようなものまである。

##### 病院内でのパイア・サポートの課題

近年、院内患者サロンや体験者による相談窓口を設ける病院が増加している。しかし、その内容や運営の方法に関しては、施設により大きく差がある。地域や、その施設を利用する体験者によって、様々な形があってもよい。しかし、施設によっては、体験者相互の関わりや、病院内にあるというメリット...利用しやすさや、医療者との連携...が生かされていないところもある。2010年6月の「がん対策推進基本計画」の中間報告」では、ピア・サポートの活動を推奨するとともに、「医療従事者等のプロ・サポーターとピア・サポーターの交流や相互啓発活動」や「ピア・サポーターの質を保つための研修」を実施することを提唱する。今後、がん体験者と病院とのより一層の連携による実施が求められる。